
てのひらの中のバラ～或るヴァンパイアの贖罪～

カイリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

てのひらの中のバラ〜或るヴァンパイアの贖罪〜

【Nコード】

N9162A

【作者名】

カイリ

【あらすじ】

わたしに助けを求めてきたのは、優しすぎる吸血鬼^{ヴァンパイア}……。生きること、人の命の大切さ。それは多くの矛盾を抱えたものだった。

十 序 十

どうして私は生きているのだろう。どうして私が、生きているのだろう。

人の命を犠牲にしてまで尊いモノが、この身の何処にあるというのだ。

この穢れた手を美しいと言ってくれたお前に、この先私はどうやって罪を償っていけばいいのだ。

一体いつになったらこの苦しみから脱け出すことができるのだ。私は何のためにこの罪深い身を引きずって、何をすれば立ち止まれるのだ。

私をこの生き地獄から助け出してくれる者は、誰なんだ。

誰か。

……教えてくれ。助けてくれ。……殺してくれ。誰か。

十

ACT・1 Chap・1

Chap・1

空が、心なしか広く感じられた。時任流惟は成績表の入ったかばんを両手で抱えて、校門前の下り坂を一気に駆け下りた。頬に吹き付ける風が柔らかい。流惟は淡く微笑を浮かべて大きく息を吸った。

なんて気持ちのいい日なんだろう。思わず鼻唄を歌いながら踊り出したくなるのを堪えて、流惟は坂を下りきった曲がり角にある家に目を向けた。

叶医院。この団地唯一の病院で、規模は大して大きくはないけれど、腕は確かだ。医院長の那由多なゆたには、小さい頃から遊んでもらったりしている。

「那由多せんせえーっ」

休憩時間なのか、窓の向こうのテーブルでマグカップ片手にテレビを見ている彼に、流惟は大きく手を振った。那由多が気付き、軽く手を上げる。流惟は嬉しくなってますます大きく手を振る。その拍子に、勢いあまって転びそうになった。

「ただいまぁ」

流惟は玄関の戸を開けて言った。その目に、靴箱の上の封筒が映り込む。宛名は時任流惟様、となっていた。手に取り引っくり返してみると、差し出し人の名前は書かれていなかった。

「誰からだろ？」

流惟は目を丸くして封を切る。中には二つ折りにされた紙が入っていた。それを抜き取る。薔薇の香りが鼻孔をくすぐった。
「ラブレターかな？」

自分の言葉にくすりと笑い、紙を広げた。

その顔が、笑顔のまま引きつる。

横罫の引かれた便箋の中央、黒く細いペンで書かれた文字は、ただ一言のみを綴っていた。

わたしを殺してください、と。

流惟は何度か目をしばたいてみたが、そこに記された言葉は変わらない。流れるような伸びやかな文字は、しかしどこか緊迫した感を彼女に与える。流惟は困惑した。

「えーと……何これ？」

嫌がらせだろうか？

思い、流惟は首を振る。少なくとも嫌がらせを受けるようなことをした覚えはないし、そんな相手もない。取り立てて仲の悪い、気の合わない人も心あたりがなかった。

単なるいたずらだろうか。そうならいい。けれどなぜか、心の中に引つ掛かるものがあるような気がする。

「せっかく、明日から夏休みなのにな……」

流惟は溜め息と共にそう漏らした。

存外よかった成績のおかげで舞い上がっていた気分も、すっかり沈んでしまった。

ACT・1 Chap・2

Chap・2

翌朝、恐る恐るポストの中を覗いた流惟は、ほっと胸を撫で下ろした。あの変な手紙は入っていないようだ。

昨晩は手紙が気になってあまり眠れなかった。誰があんな手紙を書いたのだろう。いたずらだとは思うが、もし本気だとしたら。

差出人は、自分の知り合いなのかもしれない、思う。全くの他人に、殺してほしいと頼まれるいわれはない。

流惟は、頭の中が混乱するのを感じた。推理小説などといったものについて縁のない生活を送ってきた彼女である。手紙の差出人を推理して見つけ出すなんて、到底無理な話だ。

流惟はリビングのテーブルの上に新聞を置くと、そのまま自分の部屋へ引き上げた。午前六時。朝食にはまだ早い。起きるのが早すぎたようだ。

ベッドに寝転がり、せっかくの春休みだし、もう一眠りするの
も悪くないかもしれない、などと思う。そうだ、そうしよう。
思い付いたら即行動、が流惟の信条だ。

布団を被って目を閉じたちょうどその時、背後で何かが落ちる
ような音がした。動くのも億劫だったが気になり、ゴロリとそちら

に寝返りを打つ。

目に飛込んできたのは、フローリングの床の上の白い封筒。

流惟は背筋が寒くなるのを感じた。部屋の窓は少し開いているが、人が入ってきた気配はないし、そもそも入って来れる訳がない。流惟の部屋は二階なのだ。わざわざ手紙を届けに壁をよじ登ってくる人がいたらお目にかかりたいものだ。

でも、じゃあ手紙はどこから？

流惟は高鳴る心臓を押さえて封筒の中の紙を取り出した。昨日と全く同じ真っ白な横罫の便箋。震える手でそれを開き、目を落とした。

『わたしを殺してください』

昨日と同じ言葉が、流麗な文字で綴られている。流惟はシャツの胸元をぎゅうつと掴んだ。

いったい、誰なんだろう。こんな君の悪いいたずらをするのは。

ふと、もう一枚あることに気が付く。流惟はそれをゆっくりと読み始めた。

『いきなりこのような手紙を送りつけて、申し訳ありません。けれどどうか、お願いいたします。わたしを殺してください。』

わたしはサイプリスと申します。あなたは憶えていないかもしれませんが

せんが、わたしはあなたと以前お会いしたことがあります。
わたしを殺してください。

あなたからの良い返事を、心よりお待ちしております』

流惟は手紙から目がはなせなくなる。君が悪く、悪質ないたずらだ。サイプリスなどといういかにも仮名じみた名前を使っていることにも信用がいかない。

けれど流惟は、このサイプリスが、ふざけているようには、どうしても思えなかった。何故かはわからない。手紙の、『あなたは憶えていないかもしれませんが、わたしあなたと以前にお会いしたことがあります』という一文が気にかかるからかもしれない。……これだって、口先だけの嘘であるだろうに。

ACT・1 Chap・3

Chap・3

手紙は、その日から毎日一通ずつ届いた。毎回同じ内容だったが、全て手書きで、微妙に違っていている言い回し。このサイプリスと云う人間は、口が巧く人の心を掴む天才だと思う。たった三、四通のメールを読んだだけで、流惟はサイプリスをどうにか助けてあげたいと思うようになっていた。サイプリスを死なせてはならない、と感じる。

流惟はサイプリスからの手紙を開いた。今日のも、同じ文から始まっている。流惟はそれにひととおり目を通すと、手近あったボールペンを滑らせた。

『あなたはなぜ、そんなに死にたがるのですか。なぜ死ぬ必要があるのですか？ 自分の命を粗末にするのは、とても馬鹿なことだと思います』

そこまで書いた方がいいが、馬鹿馬鹿しくなってボールペンを机の上に置いた。

そもそも手紙を書いたところで、サイプリスがこれを見ることはないのだ。

「ほんと、意味分かんないよ……………」

流惟は呟き、便箋を二つ折りにしてボールペンの下に入れた。朝食を食べて戻ってきたときにもしこの便箋がなくなっていたら、信

じるのに。

溜め息混じりにひとりごとすると、流惟は部屋をあとにした。

十

「なくなってる……、」

流惟は机の上を真っ直ぐに見据えたまま立ち尽くし、やっとそれだけを口にした。

ないのだ、先程書いた手紙が。ボールペンは有るのに、便箋だけがなくなってしまった。

流惟はにわかに体の力が抜けていくのがわかった。床に膝をつくと、白いものが目に写る。封筒だった。表に時任流惟様、とだけ書かれた封筒だった。

流惟は汗ばむ手でそれを開けると、息を吐いて目を落とした。

『お返事を下さって嬉しいです。お恥ずかしながら、わたしには自ら死ぬことのできない理由があります。自分では死ねないのです。私が死ぬ必要、それはこれ以上の罪を重ねないためです。私が生き続けるということは、その分だけわたしの犯す罪が増えるということなのです』

そこまで読んで、背筋が水を浴びたように寒くなるのを感じた。

サイプリスは、犯罪者なのかもしれない。未だ捕えられていない、逃亡中の犯罪者だ。それならば、罪を重ね続けないために自分を殺してくれ、という頼みも分かる。否、死を望むほど罪を悔やんでいるのなら、自分でやめることはできないのだろうか？

頭の中がひどく混乱してきた。流惟はその突破口を探るように、手紙の続きを目で追った。

『聡いあなたのことです。から、わたしが自分自身でどうにかできるのではとお思いでしょう。けれどどうか、わたしに常識的な償い。かたを求めないで下さい。自首をしたところで、警察はわたしを相手にはしてくれません。自分で罪を悔やんでも、止めることはできないのです。わたしの罪を終わらせられるのは、わたしを殺せるのは、この世では唯一人、あなただけなのです』

流惟は顔をしかめた。サイプリスのいう意味が、よく分からない。自首をしても相手にされないというのだから、彼は犯罪者ではないのだろ。では、サイプリスが犯した罪というのは？　そして、サイプリスを殺せる人間が、流惟だけというのは？

疑問ばかりが重なり頭を悩ませていると、もう一枚、手紙が封筒の中に入っていることに気付いた。流惟はそれを抜き出し、目を走らせ、それから呆然とその文字を見つめた。

『信じられる話でないことはわかっております。けれどあなたになら信じていただけると願い、打ち明けましょう。』

わたしは、人間ではございません。ヴァンパイア　つまり、吸血鬼なのです』

.

ACT・2 Chap・1

八月の田畑は青々と茂り、目に眩しく映った。電車の外の景色は、めまぐるしく巡っていく。

サイプリスの衝撃的な告白を受けてから数日の間は、サイプリスの冗談かと思った。けれどどうやら、冗談ではないらしい。彼はある新聞記事を見て欲しい、と同封してきた。言われるがままに記事に目を通した流惟は、はて、と首を傾げた。

『丁県春日町で女性の痛みが発見された。死因は自宅のベランダからの転落によるものとみられている』

亡くなった女性には悪いが、これといって大事件と言うわけではない。実際、記事もそれだけであり、深く追及はされていない。この記事とサイプリスがヴァンパイアであることとの間に何かしらの関係があるとは思えない。けれどサイプリス曰く、その女性の死因は転落死はなく、失血死 サイプリスに血を吸われたせいだという。

サイプリスは流惟に自分の屋敷にきてほしいと頼んだ。

危険なことは容易に想像できる（それはサイプリスがヴァンパイアであるなしにかかわらずだ）。けれどあえて、彼女はサイプリスの屋敷に行くことにした。丁度夏休みだし、何よりサイプリスを助けなければならぬ。ここまで関わった以上、死ぬかもしれないサイプリスを見捨てるわけにはいかなかった。

「流惟、あまり身を乗り出すなよ」

「大丈夫、那由多せんせ。風が気持ちいいよ」

「ああ。ここまで吹き込んできてる」

叶那由多はふうと溜め息を吐きながら、流惟に笑みを見せた。
かのうなめた

流惟ははじめ一人でサイプリスの屋敷に行こうとしていた。それをすっかり那由多に漏らしてしまうまでは。那由多は当然のことながら猛反対したが、流惟の意思が揺らがないと分かると、自分も付いていくと言いつ出したのだ。流惟も一人でヴァンパイアの屋敷に行くのはあまりに不安だったので今に至る。

流惟は、昔から自分に甘い彼の向かいに座りなおした。

「せんせ、病院の方は大丈夫なの？」

「親父に任せてきたからな。まだ若いんだし、平気だろ」

那由多は煙草吸うぞ、と断りを入れてから胸ポケットの煙草箱を取り出した。

確かに、那由多の父はまだ50代にもなっていない人で、病院を早々に那由多に譲って以来は『ご隠居』としてあちこちを旅したり、たまに病院で那由多の代わりに診察をしたりしているようだった。気楽なもんだよな、と父親以上にしっかりした息子は溜め息をつく。

「何度も言うが、流惟」

那由多は紫煙を吐きながら真面目な顔をつくった。お医者さんなのに体に悪いことをしているなんて矛盾してるなあ、などと考えていた流惟は短く返事をして彼の顔を見返す。

「危ないことは絶対にするな。必ず俺を頼れ」

「あいつ」

大きく頷くと、那由多は満足そうに表情を崩して流惟の頭を撫でた。

「……………那由多せんせ。サイプリスさんは、本当に吸血鬼だと思う？」

「さあな。そんなものはいないと思いたいね、俺は」

「せんせ、怖い？」

「怖がっているのはお前だろう」

流惟が笑みを含んだ表情で訊くと、嘲笑で返されてしまう。あながち間違ってもないので、流惟は笑って誤魔化した。

ACT・2 Chap・2

Chap・2

何本か電車を乗り継いで降り立った春日町は、世辞にも都会的とは言えないところだった。けれど廃れた感はなく、広がる緑の向こうに見える家も、どこか優雅だ。

「うわぁ……」

流惟はまるで絵本の中に出てくるような森の小道の中を歩きながら歓声をあげた。鬱蒼と茂った木々の間から差し込む木漏れ陽があたたかい。確かに、こんな場所にならヴァンパイアが住んでいても不思議はない気がする。

……ヴァンパイアっていうよりも、妖精さん^{フェアリー}ができそう

流惟はくすりと肩をすくめた。那由多に話したら、中学生にもなつて、と笑われそうだけれど、彼女は『天使』や『妖精』などというものの存在を信じている。だからサイプリスに自分がヴァンパイアだ、と告げられても、さして驚きはしなかった。サイプリスを完全に信じたわけではないが、会ってみる価値があるように思えた。

「先生、すごいね!」

「何が。主語が入ってないぞ」

那由多は意地悪く笑って、振り返る流惟に答える。その言葉とは裏腹に、彼は目を細めて小道を見渡す。流惟が言わずとも彼女の感動が大きいことは一目でそうと知れたし、サイプリスに会うことを楽しみにしていることも、那由多にはお見通しだ。

小道を抜けると、そこは広場のようになっていた。ベンチがあった、そこに金髪の少年が腰かけて読書をする姿が見える。

流惟は少年に近付いて声をかけた。

「あの…… サイプリスって人の館は、どこにあるか分かりますか？」

「…… 君は？」

「あ、あの…… サイプリスさんの知人っていうか…… 彼の招待を受けてきたんですけど、詳しい道を聞いてなくて……。分かりますか？」

流惟が困ったように問うと、少年は本を閉じて立ち上がった。

「案内します。…… 付いてきてください」

少年は広場を横切って住宅街のような場所へ流惟と那由多を案内した。そこに立ち並ぶ家々はどれも大きく、流惟の家の1.5倍は悠にありそうだ。けれどこの高級住宅地の中に、人影はない。

何故か少年に会ってから無言になってしまった那由多と、どうやら無口らしい少年の間を歩く流惟は、流れる沈黙を打破するように、声をあげた。

「サイプリスさんも、こんな家に住んでいるんですか？」

「ええ、まあ。この街の外れに住んでいます」

少年はそつけなく答える。流惟は素直に感心した。

「すごい。こんなに大きな家に住んでるなんて。先生の病院と同じくらいの大きさだね！」

「ああ、そうだな」

那由多の返答もやはり、そつけない。彼は少年を凝視したまま何事か考えごとをしているように見えた。

思わず、溜め息がこぼれ落ちる。

「ああ、あそこです。あの、高台の上」

少年が指差す先に目をやった流惟は、啞然とした。

まるで中世のヨーロッパにでも建つていそうな建造物。家と呼ぶのにはあまりに大きすぎる、それこそ豪華なドレスを纏った人々が舞踏会でも催していそうな、城。

「あの、サイプリスさんの家ってあれ……ですか？」

流惟は活動が急停止した思考を必死に動かそうとしながら少年に問う。視界に入った那由多も、少なからず驚きをその顔に滲ませていた。

少年が二人の様子に笑いを堪えるように頷く。透けるような金髪が、それにあわせて小さく揺れた。

本当に、何者……？

「それでは、ルイさん、……ナユタさん」

怪訝な顔をして建物を見つめた二人に少年が声をかけた。

「この道をまっすぐに行くと、白い門がありますからそこから入ってください。右側の門柱に触れれば、門は開きます」

少年はほぼ無表情に言うと、僅かに目礼してきびすを返した。

「あの……？」

「僕は用事があるので、失礼します」

「そうですか。……ありがとうございます！」

流惟は頭を下げた。少年はその姿に口元を歪め、那由多を一瞥すると、先程きた道を引き返していった。

.

A C T ・ 2 C h a p ・ 3

C h a p ・ 3

間近で見ると、サイプリスの館はより迫力があつた。威圧感のよ
うな重々しい空気が、押し迫ってくる。流惟が思わずかばんの紐を
持つ手に力を込めると、後ろから肩を抱きかかえられた。那由多で
ある。

彼は少年が言っていた通りに、右側の門柱に流惟を抱いていない
方の手を触れさせた。高さは彼の目線よりも2、30cmほどもあ
る門が、微かに音を立てる。

ギイ

.....

鉄が軋むような鈍い音が響き、ひとりでに開いたそれに、流惟は
心臓が早鐘を打ち始めたのを感じた。

「吸血鬼……屋敷」

呟いた途端、足がすくんだ。自分がやろうとしていることは、と
んでもないことなのではないか。今会おうとしているのは、限りな
く『危険』な人物なのではないか。 そんな考えが、今になつ
て込み上げてくる。

わたしを、殺してください。

サイプリスを死なせてはならない。わたしは、彼と話をしなければならぬ。

どうしてそう思うのかは分からないけれど、不思議と恐怖が吹き飛んでしまった。

「……流惟、」

気遣わしげに顔を覗きこんでくる那由多に微笑んで、流惟は足を踏み出した。

視界の端に赤いものが入り込む。ふわりと鼻をつく甘い香り。

流惟は玄関の扉のすぐ横にあるそれを見て、歓声をあげた。

大きく、立派な薔薇。優雅に咲き誇るそれは、風が吹いても揺れることなくそこにいた。

「きれーい……」

流惟は那由多から離れてそれにかげより、顔を近付けて呟いた。

「お気に召していただけましたか」

背後からの声。流惟は聞き覚えのあるその声に、振り返った。

「……わたし、道間違えました？」

目を丸くして問う。声の主は、先程道案内してくれた金

髪はの少年だったからだ。彼は艶然と微笑んで首を振る。

「いいえ。」

我が緋薔館ひしやうかんへようこそ。わたしが主のサイプリス

です」

「……………え？」

流惟はますます目を大きく見開いた。愉快そうにサイプリスが笑む。

「こんな田舎まで、はるばるありがとう。君なら来てくれると信じていました」

サイプリスは言いながら、玄関の扉を開けて館へと流惟と那由多を促す。那由多は警戒するようにサイプリスを見据えたまま、流惟の後に続いた。

館の中は薄暗く静かだった。物はあまり多い方ではなく、家具も必要最低限度のものしかないが、少ない調度品はどこか上品な雰囲気をもたせている。

玄関のフロアだけでも、流惟の家半分の広さがあった。

「お腹はすいていませんか？ 昼食を用意させましょう」

サイプリスはきよきよと館内を見回す流惟を振り返った。那由多に微笑を与えてやり、すぐに視線を流惟へと戻す。

流惟ははにかみながら言葉を濁した。

ACT・2 Chap・4

Chap・4

「さて、いろいろ質問があることでしょう」

何なりと訊いてください、と笑むサイプリスに流惟は頼張ったクロワッサンを飲み込んだ。

ダイニングルームには大きなテーブルがあり、今は使われていない暖炉と、いかにも高級そうな食器棚が壁沿いに据えられている。那由多と二人、隣同士に座る流惟の前にはパンと、サラダと、メインディッシュ、スープ、デザート、紅茶がずらりと並べられていた。すっかり空腹をもてあましていた彼女には、目もくらむようなご馳走である。

対しサイプリスの前には、紅茶しかない。先ほど、大きな振り子時計がちょうど十三回鳴ったばかりだから、もう先に昼食は食べているのかもしれない。

「あの、わたしの家に 部屋に、手紙はどうやって届いていたんですか？」

流惟はぼんやりとそんなことを考えながら質問をする。

流惟とサイプリスの文通は、間に郵便局も電話回線もインターネット回線さえも介さなかった。流惟はサイプリスの手紙に返事をかいて机の上に置いておくだけで、少し目を離れたときにその返事の手紙がまた届いていたのだ。この不思議なやりとりがなければ流惟は

彼をヴァンパイアだと信じることは決してなかったに違いない。

「ヴァンパイアは、姿を変えることが出来ます。手紙は主に、鳥になって届けに行っていました」

「コウモリじゃなくて、か？」

サイプリスの答えに那由多が口を挟む。どうも彼は、サイプリスのことが気に入らないようだ、と流惟は思わず苦笑した。

「あの姿は、意外に目立ちますからね」

サイプリスは気にした様子もなく穏やかな口調で微笑み、続ける。
「見知らぬ人間を警戒するのは賢明なことです。しかし、それには毒なんて入っていませんよ」

那由多は、先ほどから一口も食事を口にしていなかったのだ。早くも不穏な空気に、流惟は慌てて言葉を探した。

「せんせ、本当だよ？ このパン、すごく美味しいです！」

「……気を遣うな、ばか」

「ルイのお口に合ったのなら、よかったです」

かえってフォローされる形になってしまった。頭を那由多に小突かれた流惟ははにかむと、再びサイプリスの顔を見る。

年の頃は流惟と同じくらいの美少年だが、言動は妙に大人びていた。先ほど彼が言っていたように、サイプリスの容貌は、仮の姿なのかもしれない。

A C T . 3 C h a p . 1

C h a p . 1

「いいか、流惟。俺が呼びにいくまで部屋から出るんじゃないぞ」
那由多はサイプリスの、館内を自由に物色してもかまわないとの言葉を受けて、彼の素性について調べに出たのだ。流惟がどんなに一緒にいていくと主張しても、

「危険だから」の一点張りで頑として同行を許さない。結局根負けした流惟は部屋で留守番をする羽目になった。ご丁寧にも内側からの施錠も義務付けられている。

どうにも那由多せんせは、昔から過保護なところがある。そう溜め息をついた彼女は、ごろりと豪華な装飾の施されたベッドに寝転がった。

部屋の中は落ち着いたベージュの家具で統一されていて、下手に安いホテルよりも高級感があふれている。広さも十分すぎるほどあり、西側の壁にはベッド、東側の壁にはデスクが据付で置かれていた。

「つまんなーい！」

しばらく大きなベッドの上を転がっていたがそれは暇つぶしにもならない。仕方なく流惟はベッドから跳ね起きると、南に面した大窓にぱたぱたと歩み寄った。窓を開けるとすぐに円形のバルコニーに出られるようになっていいる。

窓を開け放った流惟の鼻腔を甘い香が掠める。見れば、窓の下には見渡す限りのバラ園が広がっていた。

「うわぁ……すごい……！」

「気に入っていただけましたか、ルイ」

「はい！ とてもきれいですっ！」

声をかけられてバルコニーの下を覗くと、相変わらず穏やかな微笑をたたえたサイプリスが立っていて、流惟を見上げていた。流惟は大きく頷いて笑顔を見せる。

「よろしければ、降りてきて一緒に見ませんか？ バラのアーチがあるんですよ」

サイプリスはバラ園の方を指差して首を傾げる。流惟はわずかに逡巡したが、すぐに首を縦に振ると、部屋を飛び出した。那由多の言いつけを思い出さなかったわけではないが、退屈を紛らす事の方が最優先であったし、サイプリスのことをもつとよく知るためには、いい機会だと思ったのだ。

ACT・3 Chap・2

Chap・2

「わたし、あなたを殺すなんてしたくありません」

二人で並んでバラのアーチをくぐりながら、流惟はそう口を開いた。サイプリスはわずかに目を伏せる。穏やかな微笑が崩れることはない。

「殺してもらわなくては困ります ルイ、私を助けてください」

「殺すことが助けることだなんて、悲しすぎますよ。ほかに何か方法があるはず 」

「もしそんなものが」

流惟の言葉を遮ったサイプリスの声は、ひどく冷ややかだった。けれど向けられた目は柔らかなままであったから、その格差に流惟は少なからず困惑を見せる。

「もしそんなものがあつたのだとしたら、わたしはとっくに見つけていたでしょう。このような身体になって以来、何も遊んで過ごしてきたわけではないのですから。それにそのような方法は、ない方がよいのです」

わたしは罪を償うべくして今、ここにいますのですから。

流惟は思わず泣きそうになるのを押し殺して、彼の横顔を見つめた。サイプリスは何か、深い悲しみに囚われているようにも見える。それは誰か、大切な人を失った時のひどく陰鬱とした空元気にも似ている、と思った。

あのときのわたしに似ているんだ、

流惟はふとそう思い、ますます彼を死なせたくはない、と唇を噛み締めた。

「さあ、つきました」

「わあ……！」

サイプリスの声に我にかえった流惟は、目を見張って呟く。

アーチを抜けたそこに広がっていたのは緋一色。種類も形もさまざまなバラが咲き誇るその奥には、大小おびただしい数の墓石が見えた。

「気味が悪いでしょう」

サイプリスが嘲笑する。一步その中に踏み込むと落ちたバラの花弁が舞い、むせ返るほどの香が鼻をついた。

「ここにあるバラの花弁は全て、赤くなるんです。どんな種類のものも植えても、植えた当初はたとえ白くても、二、三日すると赤くなってしまふ」

サイプリスは花弁を一枚摘み上げる。流惟は近くの墓に歩み寄った。

「このお墓はサイプリスさんが……？」

「うん。ああ、でも全部ではありませんけれどね」

サイプリスが微笑する。ごっ、と風が吹いた。赤い花吹雪。

「呪われているんでしょう。この墓の下には、わたしが殺してしまった人たちが眠っているから……だから彼らの憎しみが、バラを赤く染め上げる」

流惟はサイプリスを見た。彼の顔は透けるように白い　　否、

青い。具合はよくないのだろう。

休んでいなくてよいのか、と問おうとしたが、言葉にすることはできなかった。彼の表情はこの世に別れを告げているように見えて、何も言えなくなってしまうたのだ。

流惟は手持ち無沙汰になって辺りの墓を見渡した。ほとんどがグレーの石で作られたもので、正面には横文字でその墓石の下の人物の名が刻まれているようだ。そんな中であって、ひとつだけ白い墓石が目に残る。たくさんの墓石の最奥に、それは少しはなれて建てられていた。流惟はそれに近づこうと足を踏み出す。

「痛ッ」

右手の甲に鋭い痛み。見れば、バラの棘で切ってしまったらしく、少量の血が出ていた。

「ルイ、大丈夫ですか？」

慌てたように駆け寄ってきたサイプリスは、流惟の手の甲を見ると、ハッと立ち止まる。見る見るうちに顔は青ざめ、喘ぐような吐息に変わった。

「サイプリス……さん？」

心配そうに流惟が声をかけると、彼はひとつだけ大きく深呼吸をした。すぐにサイプリスは呼吸を整えると、己のシャツの袖を破って流惟の手をとる。

「気をつけてください。あなたの綺麗な肌が傷ついてしまうのはほんとにも惜しい」

壊れ物でも扱うかのような手つきで、彼は慎重にシャツの切れ端を流惟の手に巻きつけた。

「あ……、ありがとうございます」

「屋敷に戻ったらちゃんと手当てをしましょう。そう、ナユタさんは医者なのでしょう？」

「はい、わたしのうちの近くの病院の院長先生なんです！」

流惟は誇らしげに頷いて応える。サイプリスは目を細めて口元に笑みをたたえた。

「素晴らしい　まだ若いのに」

「先生は、本当に優秀なお医者さんらしいです。おうちも何代も前からずっと医者の家系らしくて」

すごいですよええ、と繰り返す流惟にサイプリスが頷いて見せれば、自分のことを褒められたかのように顔を綻ばせた。

「ルイとナユタさんはずいぶんと親しいようですが、お付き合いは長いのですか？」

「わたしがまだ幼稚園のころ　わたし、交通事故に遭って、那由多せんせのおうちの病院に運び込まれたんです。そのとき、先生はまだお医者さんにはなってなかったんですけど。わたしに輸血をしてもらって」

少し照れくさそうに笑った流惟は、

「だから」とはに cand 口で続けた。

「先生つてば、ずっと過保護なんですよ。わたしの親なんかよりずっと心配性で！」

「ルイは大切にされているんですね」

サイプリスはそう言うのと、ずっと手を伸ばして流惟の髪を梳く。その仕種は実に自然で、流惟は頬が熱くなるのを感じた。サイプリスは鼻眉目なしに美しい顔立ちをしていて、思わず見惚れてしまう。彼の金髪は陽光に透けてかがよっており、時折吹く風になびいていた。容貌はそう、天使のよう。

「わたしが血をもらったのは、那由多先生だけじゃないらしいんですけどね」

「……と言いますと？」

サイプリスに促され、流惟は頷いて続けた。

「わたしが事故に遭ったときに居合わせた人が、病院までついてきてくれたらしくて。ちょうどその日は前日に他のオペがあつて、わたしと同じ血液型の血が足りなかったらしいんです。那由多先生のだけでは足りなくて、その人も血を分けてくれた、と聞いています」

流惟はサイプリスを見た。その手術に立ち会った看護婦によれば、それは色が白く、絵画の中から抜け出たように美しい青年で、物腰も柔らかく文句のつけようがない人だったらしい。

なんだかサイプリスに似ているな、と流惟は胸臆でそんなことを

考えた。

サイプリスはどうか切なげに目を細めて流惟を見つめると、

「傷は、」

「え？」

「その事故で負った傷は、残ったりはしませんでしたか？」

言いながら髪に触れてくる彼の、右の手のひらにある痣は、バラの形に似ている。

「額に少しだけ残っていますけど、ほとんど見えません。」

あ

の、サイプリスさんは、その痣……」

「これですか？」

サイプリスは流惟に右手を差し出した。それをまじまじと見つめた流惟は頭の上で、彼が笑った気配を感じる。

「わたしがヴァンパイアとなった証……でしょうかね。わたしはこの痣を負った日に、このような罪深い身体となったのです」

そう言った声は自嘲じみていたけれど、彼の目はひどくいとおしげに己の手のひらを見下ろしていた。

ACT・3 Chap・3

Chap・3

そろそろと部屋に戻ってきた流惟が真っ先に見たのは、かつてないほど不機嫌な顔をした那由多だった。彼は流惟のベッドに腕組みをしながらその長い足を組んで座っていた。それはまるでモデルか俳優のように実に格好が良かったけれど、
だからこそ、恐ろしい。

「あ……、ただいまー、せんせ」

「流惟、」

殊更明るい声音に那由多は立ち上がると、つかつかと大股で、ゆっくり流惟に歩み寄る。

「あ、あの、ごめんなさー」

謝ったが勝ち、とばかりに慌てて頭を下げようとする流惟は、皆まで言い終わらぬうちに那由多に頬を引っ張られた。

「ひ、ひえんひえ？」

「俺の言葉をもう忘れたのか」

怒鳴られるかと思っただけで、存外静かな声で那由多は言った。

流惟は動かない首を振って彼の顔を見る。

「どれほど俺が心配したと思ってるんだ」

「ほ……ほふえんははひ」

しゅんとして謝ると、ようやく頬をはなされる。流惟は両手で頬をさすりながら、恐る恐る彼を見上げた。

「まったくお前は、昔からすぐ無理をして」

「ごめんなさい。……でも、わたし、もっとあの人を知らなくちゃ

いけないって思ったから……、」

流惟の言葉に、那由多の眉がピクリと動く。

「それで。何か分かったのか、あの化け物について」

「サイプリスさんは化け物なんかじゃないもん。先生のことと褒めてたし」

「何の話をしているんだよ……」

那由多はあきれたように溜め息を吐き出して、眉間にしわ寄せた。けれども纏う空気は一瞬にして柔らかくなる。

「先生は何か見つけたの？」

「ああ、」

那由多は部屋に入るよう流惟を促しながら頷いて、眼鏡のフレームを指でツイと押し上げた。

「三階の一番奥の部屋は、研究室のようだったな。ただしアナログな器具ばかりだったが」

「研究室って、何の？」

「それは分からん。ひととおり見ただけだったからな。医療器具も思いの外揃っていたが……あいつは自分が医者だと言っていたか？」

那由多に問われた流惟は、そういえば自分のことばかり話してサイプリスのことは聞いてなかったなと思いつく。彼が何処の国の人なのかさえ聞いていないのだ。

もう一度ちゃんと話さなくては、と考えていると、那由多がベッドに腰を下ろしながら流惟を手招きした。素直に彼の前に立てば、両の頬に手が伸びてくる。また引っ張られるのはごめんだ、と流惟は慌てて自分の頬を押さえた。

那由多は呆れたように、ばーか、と笑いながら流惟の手の上から己の両手を添えて、彼女の瞳をしっかりと見据えて口を開く。

「もうじつとしているなんて言わない。言っても無駄だろうし。だからせめて、俺に一言言え。お前に何かあったら、親御さんに合わせる顔がなくなる」

「……何かあったら、ちゃんと先生を呼ぶようにします」

「よし。いい子だ」

「また子供扱い！」

白い歯を見せた那由多に、流惟はむうと口を尖らせた。

「流惟が心配だから言っているんだ。子供扱いなんてしてない。そもそも、」

流惟の前髪をかきあげて額に触れた那由多の指は、静かに彼女の髪の生え際の、うつすらと残る傷跡をなでた。肌の上を滑る指がくすぐったい。

「子供だと思っていたら、こんなところに来るのも反対したよ」

穏やかなバリトンの声は耳に心地が良くて、流惟は先程の憤慨さえどうでも良くなってしまった。

ACT・3 Chap・4

Chap・4

「……あのー、入ってもいいですか」

流惟はサイプリスの部屋のドアの前に直立して声を張り上げた。
今しがた部屋を出てきたときには、時計は午後十時を示していた。
午前中に見つけた研究室にいく那由多と一緒にここまで来たのだから、今回は叱られる心配もなかった。その研究室とサイプリスの部屋とは、同じフロアにある。

「なぜ」

ドアの向こうからの返答は、あまりにそっけない。流惟は一瞬戸惑って、

「たいした理由はないんですけど……あんまり、あなたのことを聞いていなかったなあと思ってた」

「明日ではいけませんか？ もう夜も遅い」

「あの……ごめんなさい。迷惑でしたよね。やっぱり、明日でいいです」

あつさりと引き下がるより他なかった。まさか、本当は一人でいるのが恐いだけだなんて、言えるはずがない。部屋に入れてもらえたところで、何をしようというわけでもないのだ。

「……ルイ」

おとなしく部屋に戻ろうとしたとき、再びサイプリスの声がした。
「夜は、我らの力が最も強まる時間です。わたしを殺すのなら、昼間にしてください。暗闇の中では、わたしも自分を制御しきれない

ことがある」

殺しに来たわけではないのに。流惟は小さく溜め息をつく。

「サイプリスさんは、寝ないんですか？」

「わたしは夜行性ですからね。夜はむしろ目が冴えます」

「じゃあ、少しお話しませんか？　わたしはここにいますので。わたしも今は、目が覚めてるんです」

言って流惟は扉の前に座り込んだ。サイプリスは応えない。けれど、中で微かに笑ったような気配がした。

「サイプリスさんは、何年くらい日本にいますか？　日本語上手ですよ」

「そうですね、日本には百年くらい。まだ日露戦争が終結して数年たったばかりの頃でしたから、」

さらりと言うサイプリスに、流惟は目を丸くした。ヴァンパイアである彼が長生きであるのは予想していたが、こうもさらりと言われると返す言葉もない。しかもサイプリスの容姿は自分と同じくらいの少年だというのに。

「……ちなみに他の国にもいたんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

「一番長いのは、実は日本なんですよ。あとはイギリスかな。わたしの母国ですし」

イギリスかあ。流惟はのんびり、胸中で呟いた。おおそ予想通りだったか、日本がもっとも滞在期間が長い国だとは意外だった。

「あとは、フランスとドイツとアメリカ……中国にもいたことがあったかな」

「あのー……サイプリスさん、お幾つなんですか？」

「百三十年ほど、ですかねえ。これでも短いほうなんですよ。わたしの知り合いには、去年六百歳を迎えた方もいらつしやいますから」
頭痛がした。あの少年の容姿で百三十歳です、だなんて、「冗談でも言っただけではない。事実だから仕方がないのだけれど。」

「でも……百三十年も生きてきたのに、どうして今、死のうと思っ
たんですか？」

「ルイは、永遠の命がほしいですか？」

聞き返されると言葉に詰まる。

確かに死ぬことは怖い。でも人間はいつかは死ぬものだ。年齢を重ねて生きていくことで、死が近くなったところには恐怖など消えてしまうのではないのだろうか。そうなればむしろ、永遠の命などというものは、寂しいばかりではないだろうか。サイプリスはその寂しさに、耐えられずにいるのかもしれない。

「終わり人生が、必ずしも寂しいものであるとは限らない」

サイプリスは流惟の考えを見透かしたように言う。じゃあ何で、と流惟は首をかしげた。

「多くの人と出会い、その死に目に遭いました。でもそれは、人間だつて同じでしょう。人間よりも少しその回数が多いだけ」

少しというのは誇張表現であるように思えたが、流惟は何も言わずに彼の言葉を聴いていた。

「わたしが生きていれば、罪が重なるのはどうしようもないことです。人を襲わないように部屋に閉じこもっていても……夜が来ると、意識がなくなる……苦しくて、苦しくて、意識を失って……気がつくとなわたしの手は、赤く染まっているんです。冷たくなった人間が、虚ろにこちらを見ているんです。どんなに絶とうとしても、わたしは食事を止めることができない……っ、こんな身体、自ら望んでないなかったのに……！」

流惟は静かに目を閉じた。自分が生きていること自体が罪であるということが、どれほどの苦しみであるかなんて、想像すらできなかった。

「この苦しみはかりそめだから　　夜になると、姿は戻ってしま
うんです」

喘ぐような声に、流惟はドアに歩み寄る。

「サイプリスさん？　大丈夫ですかっ！」

「何……毎夜のことだ……痛みには慣れていますよ」

サイプリスの声のトーンが低くなる。言葉の終わりを紡ぐころには、すっかり声変わりした青年ほどの低さになっていた。

「あと四日……、」

青年サイプリスが呟いた。

「お願いですから、あと四日でわたしを殺してください。そうじゃないと……、」

サイプリスはそこで口を噤む。続きは聞くまでもなかった。流惟は目の前の、古ぼけたドアを見つめる。

殺されるかもしれないという事実が目の前にあるというのに、サイプリスを殺す気にはなれない。むしろ死なせてはならないと

その思いは、とどまることを知らない。けれど方法がわからないのだ。そもそも死以外に彼を苦しみから解き放つ手はあるのだろうか？

ACT・3 Chap・5

Chap・5

真つ暗な部屋に風が吹き込む。白いカーテンが揺れる隙間から、蒼い月光が部屋を照らしていた。

流惟は扉の近くに立っていた。ここがどこの部屋であるかは分からない。ただ、窓の傍らに立つ人影を凝視しているのだった。

月光がその人物の顔を舐める。艶やかな金髪、憂いを帯びた美貌。西洋的な顔立ちをした青年だった。見知った姿ではなかったが、流惟はその青年がサイプリスであると直感する。伏しがちな目や、雰囲気がそっくりなのだ。

青年は流惟のことを見ようとせず、ベッドの中の人物に目を向けていた。安らかな寝息を立てるのは、日本人の若い男性であるようだった。

突然、サイプリスが体をかがめて日本人の顔を覗き込み、その首筋に顔をうずめる。流惟が立っている位置からはそれが首筋であるかさえよく分からなかったが、耳元で何かを囁いているようでもあった。

（……………え？）

流惟は目を丸くして二人を見ていた。声を上げたはずだが、聞こえていないらしい。

「……………ん……………？ サイプリス……………？」

青年が半身を起こす。サイプリスは答えない。

「まだ、夜中じゃないか……………。寝かせてくれ」

寝ぼけた声で言う青年を、サイプリスは無言のまま縋りつくよう

に抱きすくめる。青年は慣れているのか、泣いている子供をあやすようにサイプリスの背を軽く叩いた。

そんな動作から目を離せなくなっていた流惟は、はっと我に返ると、慌てて二人に背を向けた。なんだか見てはいけないものを見てしまったような気まずさが広がる。部屋を出て行こうとドアノブに手をかけた。

でも、あんな人、この屋敷の中にいたのだろうか？

流惟がそう思い直して振り返ったところに、青年のわめき声が響く。

「サイプリス……っ！ 目を、覚ませっ！」

ひどく緊迫した声音に、思わず数歩歩み寄った。その鼻に届く、つんと錆びた臭い。

（……………？）

何が起きているのか分からなかった。二人の体勢に変わりはない。サイプリスが青年を抱きかかえて首筋に口を寄せている。ただし先程までは聞こえていなかった、ずず……、と何かを嚙るような音だけが、その静寂にまぎれていた。

（さ……、サイプリスさん……？）

流惟が立ち尽くしたまま声をかけるが、サイプリスには聞こえていないようだった。振り向くことさえ、ない。

何かを嚙るような音だけが、いやに大きく、聞こえた。

いつまでそうしていただろうか。それまで絶えず鼓膜を震わせていた音が、なんの兆しもなくぴたとやんだ。

「……………リヨ、ウ？ リヨウ……？」

サイプリスがか細い声で呟く。青年が、彼の腕の中からずるりと

床にくずおれる。

青年の胸元は、赤く染まっていた。

サイプリスはよりりと力なく後ずさって、不意にこちらを見た。
真っ赤に染まった口と、緋い雫の滴る顎。そして、だらしなく開いた口唇の向こう側にちらつく、

鋭い、牙。

「う……、うあああああああああ！」

「きゃあああつ」

流惟は自分の悲鳴で目を覚ました。

夢だ。とても生々しい夢。

心臓が早鐘を打っていて、あのサイプリスの 吸血鬼の顔が
脳裏から離れない。

「う……うあ……あ……っ、」

呻き声をする。サイプリスの部屋からだ。

「サイプリスさん……？」

流惟は立ち上がった扉に歩み寄る。いつの間にかかけられていた
毛布が床に落ちる。ドアがわずかに開いていた。

「大丈夫ですか？」

「来るなッ」

大音声に、流惟はその場に立ち竦む。夢に出てきたあの金髪の青年が、苦しそうに体を折つてもがいていた。

「でも……！」

「ルイ……ッ、今、すぐ……部屋に戻りなさいッ、早くッ」

「苦しいんですか？ サイプリスさんっ」

「早く……逃げろッ」

サイプリスは流惟を突き飛ばす。

「流惟っどうした！」

声を聞きつけたのか、那由多が息を切れして駆け込んできた。

研究室の壁の本棚には、所狭しと書籍が並べられており、机の上には埃を被ったメスやら試験管やらが整頓されて置いてあった。埃を被っているとは言っても、こまめに掃除されている形跡はある。

那由多は本棚に歩み寄って、無作為に一冊を抜き取る。背表紙には『一九一五―一九一七年六月』とある。

（カルテか……？ ずいぶんと古いな……）

黄ばんだページを来ると、人名と日付、病気の症状が一覧表になっていた。

やはりここで、医院か何かを開いていたようだ。一覧は全て日本語で、それも細筆で書かれている。サイプリスが書いたにしては、違和感が先立つ。

最後の患者の欄には一九一七年六月十四日と日付があった。

ページはまだ残っているのにも関わらず。

ふと顔を上げると、本棚の、那由多の目線より少し高いところに位置した段に写真立てが置かれていた。

写真は白黒であり、二人の青年が写っていた。一人はワイシャツに白衣姿の日本人で、穏やかで人の好さそうな笑顔をこちらに向けている。彼の右腕は、隣に立つ西洋人の肩に回されていた。西洋人は軍服を身に纏っているが、その厳つい服装にはおよそ不似合いなほど柔らかな微笑を見せている。

「この男……、」

那由多は西洋人の顔に視線を留めたまま、どこかで見た顔だと記

憶を手繰る。写真立てから写真を抜き取って裏を見た。そこには『一九一七年六月十四日 サイプリスと、叶医院前にて』と走り書きされていた。

（ 叶？ ）

己と同じ姓に、那由多は怪訝そうに眉をひそめた。単なる偶然だろう、とは思うが、全く気にかからないと言っては嘘になる。

そしてやはり目にとまるのは、一九一七年六月十四日という日付。写真が撮られ、この日を境に宅診記録が途絶えているのは、これもまた偶然の一致なのだろうか？

＊

『 リヨウ 』

ドアが開く気配に続いて、そんな声がする。見れば、写真の中の西洋人が二人分のティーカップを盆に載せて立っていた。

『 ああ、サイプリス。もう少しで終わるから少し待っていてくれ 』
すぐ隣で男性の声が言うので、那由多は驚いてそちらに視線を移す。無人で埃を被っていたはずの執務机に、白衣を着た青年が座っていた。

（ どういうことだ？ ）

戸惑って辺りを見渡すと、部屋の中の様子も幾分関わっていることに気がついた。家具の配置は変わっていないが古ぼけた、黴くさい印象はなく、全体的に明るさが満ちている。また何より、夜闇だったはずの窓の向こうから、あたたかい陽が入り込んでいた。

『 あまり無理をしすぎると身体に障るよ、リヨウ 』

サイプリスと呼ばれた青年（写真とは異なり軍服ではなく、ワイ

シャツの上に黒いベストを着ている）は手近にあった机の上に紅茶の載った盆を置くと、大仰に肩をすくめながら日本人の青年、リヨウに近づいていく。その容姿は那由多が知っている『サイプリス』のそれとは、ひどくかけ離れていた。

サイプリスはリヨウの座ったアンティークチェアの背もたれに寄りかかって、彼の手元をのぞき込んだ。二人には、すぐ側にいる那由多が見えていないらしい。

『それほどヤワじゃないよ。俺は医者だしな』

『そう言いながらこの間、風邪を引いたばかりだ！』

『医者の不養生だったか？ お互い様だよ、それは。お前だって王室付き軍人のくせに、優しすぎて、人一人殺せやしないじゃないか』
リヨウはにやりと人の悪そうな笑顔を浮かべてサイプリスを見遣る。対しサイプリスも、苦笑してわざとらしく肩をすくめた。

『これは驚いたな。命を救うドクター殿から、人を殺せと言われるなんて！』

『言っていないよ。優しさがあって初めて、君という人間が構成される、だろう？』

『人間……、わたしはまだ、人間なんだろうか……、』
突然暗さを帯びた声に、リヨウが怪訝そうな顔をした。椅子をくると回してサイプリスを向き、真顔を作って言う。

『村の奴らの言うことは気にするな。彼らは弱い。だからこそ、人種の違うお前を恐れているだけだ』

『しかしわたしは、現に人の血を……、』

『サイプリス』

苦しげに言葉をつむいだサイプリスを遮るようにしてリヨウが声を上げる。サイプリスは眉根を寄せたまま口を真一文字に引き結んだ。

『お前は俺の患者だ。歴とした人間の。決して化け物などではない。違つか？』

『……ああ、そのとおりだよ、リヨウイチ』

サイプリスの顔が歪む。リヨウは静かに立ち上がった。

『ところでサイプリス、写真館の主人は何て？』

『午後四時に来ると言っていたよ。しかし珍しいな、写真嫌いの君が写真を撮りたいなんて！』

二人で連れ立って部屋を出て行こうとするのを、那由多は混乱した頭を忙しく巡らせながら見ていた。

『まあね。……サイプリス、今月に入って二人、という数字に覚えはあるか？』

『ん？　なんだ、それは。クイズか？』

＊

ふと気づくと、那由多は本棚にもたれて座り込んで眠っていた。今は夢か、と軽く頭を振って立ち上がると、黒いスラックスが白く汚れているのが目に映る。

埃をはたきながら、夢でリヨウが就いていた執務机に歩み寄った。その上にきれいに積み上げられた紙は右肩を紐で括られ、表紙には毛筆で『人間における吸血行動』と題字が書かれてある。サイプリスとリヨウが話していたのは、サイプリスの吸血行動についてなのか、と手に取った。

「　　きゃあああつ」

ドアの外からの悲鳴。間違はなくそれは、流惟のものだ。
「流惟っ！」

那由多は息を飲んで研究室を飛び出した。心臓がいやに高鳴る。サイプリスの部屋は研究室の三部屋隣にあり、研究室から廊下に出ればすぐ見える位置にある。開け放たれた扉の前には、無造作に落ちた毛布があった。

「流惟ッ、どうした……ッ！」

肩で息をしながら部屋に飛び込むと、蹲っているサイプリスと、そのすぐ傍らに跪いている流惟の姿が目映る。

「せんせえ……っどうしよう、サイプリスさんが！」

振り向いた流惟はすっかり落ち着きを失っている。那由多は彼女を下がらせ座り込むと、サイプリスの脈をとった。脈は　　ない。

「ちッ、本物か！」

舌打ちをし、那由多は流惟を振り返る。流惟は不安そうに、青ざめた顔をしていた。

「流惟！」

「は、はい！」

「俺の部屋から鞆を取ってきてくれ。できるだけ急いで！」

「わ……わかった！」

流惟が返事をし終わらないうちに部屋を出て行くのを見ると、那由多はサイプリスに再び視線を落とした。昼間は少年の姿をしていた彼だが、今は那由多と同じ程か、少し年長くらいの青年の姿をしている。それは先程写真の中で見た西洋人の姿であり、夢で動いていた青年その人だった。

「は……あつ、何をしている……、君も早く……！」

「黙ってる。噛みついたりしたら承知しないからな」

那由多は冷たく言い放ちながら暴れるサイプリスを足で押さえつけた。

「あと四日じゃなかったのか」

「まさかこんな……ッ、早いとは……ッ、」

サイプリスは拳を握りしめながら絶え絶えに答える。力を込めすぎた手のひらには、爪が食い込んでいた。

「先生、鞆！」

流惟が駆け込んでくる。那由多は彼女が持ってきたかばんの中からエタノールを取り出して手を消毒し、腕を縛って注射器を取り出した。

「流惟、なんかその辺りに容器がないか」

「え……っ、あ、マグカップなら！」

那由多は己の腕から血を抜き取ると、それを流惟が差し出したマグカップに移し替えて、サイプリスの口元にあてがった。

「サイプリス、飲め！」

「はやく……っ、逃げろと！」

「サイプリスさん！ 飲んで！」

流惟が言い、サイプリスは荒い息で一気にそれを飲み干した。

「大丈夫……？」

「う……、リョ……ウ………？」

サイプリスは那由多の顔を見て呟くと、それきり意識を失った。

ACT・4 Chap・1

1

「う……」

サイプリスの小さな呻き声を聞きとがめた那由多は、読んでいた書物から顔を上げて彼を寝かせたベッドに歩み寄った。

「目が覚めたか、吸血鬼」

サイプリスの腹の辺りにはベッドサイドに座った流惟の頭がある。かすかに寝息を立てる彼女の肩には、毛布が掛けられていた。

「……迷惑をかけてしまったね」

「まったくだ。貧血の上に寝不足だぜ、こっちは」

半身起こしながら詫びるサイプリスに仏頂面をむけてやると、那由多は言葉を選ぶように眉をひそめた。その間を縫って、サイプリスが口を開く。

「かのつよにち叶綾一という男を知っているか？」

那由多は目を丸くした。何を隠そう彼が聞くことを躊躇していたのはその人物のことだったのだ。

「俺の曾祖父ひいじいさんだ。やつぱり、『リヨウ』ってのは」

「君の血を飲まれた時、すぐに気づいた。幾分か薄くはなっていたけれど、確かにリヨウの味がした」

「化け物め……」

那由多は苦々しく顔をしかめると、眠っている流惟のすぐ側に立って、サイプリスを見下ろす。ひどく冷ややかな瞳だったが、サイプリスは何が可笑しいのか薄ら笑った。

「そういう顔　リヨウにそっくりだ。よく言われるだろう？」

「さあな。曾祖父さんの話はほとんど伝え聞いていない。優秀な医師だったらしいが、出張中に病死した、って程度だな」

「……リヨウはね、この町に来ていたんだ。単身でやってきて、小さな診療所を開いていたのだけれど、私と親しくなってからはこの緋薔館で暮らしていた」

素晴らしい医師だったよ。

微笑むサイプリスの視線は確かに那由多に向いていたが、彼を見ているわけではないようだ。那由多ではなく、彼の顔に僅かながら伺える『リヨウ』の面影を見ているのだ。

「私が町の連中に避けられ、忌み嫌われた折も、彼は決して私を見捨てようとはしなかった。変わらず接し続けてくれた。それが、どんなに嬉しかったことか」

「曾祖父さんに会った時、あんたはもう吸血鬼になっていたのか」

「難しい質問だな　半分はそうだったが半分は違った、というのが無難かな？」

サイプリスは自嘲じみた表情を浮かべてそこでいったん口を噤むと、すぐにまた形の良い唇を開いた。

私は英国の王室付き軍人だった。階級は大佐。元来争いごとは好きではない性分ではあったが、順調に出世し、人並みの幸せは持っていた。日本に来たのは日露戦争が終結したばかりの頃。仕事ではなくて、ほんのバカンスの気持ちだったのじゃないかな。この町に居住することにしたのだって、大した理由ではなかったように思うよ。今となつては、覚えてさえいないのだから。だが、軍人としての生活に疲れてしまった、という理由も多分にあつただろう。

私はこの町に来たばかりの頃は別として、出来る限り人と接することを避けていた。言語の壁があつたことはもちろんだが、私に向けられる好奇の色に、閉口してしまつていたんだ。この容姿だからね。けれども私は人が好きだった。いつもいつも、屋敷で一番見晴らしの良い、この部屋の窓から町の人々を見ていたよ。

私がこの町に来てから十年ほどして、ふらり（・・・）とやつてきたのが、リヨウだった。小さな町だったから、医者も隣町にしかいなかったんだ。だから、彼はすぐに町の人たちからの信頼を手にし、一目置かれる存在になつていた。魅力的な男だったしね。

かくいう私もまた、彼の魅力に惹きつけられた内の一人だ。私とリヨウは、いい友人になつた。リヨウは私を「外国人」としてではなくて一人の人間として扱ってくれた。私は多忙なリヨウを度々晩餐に招いたり、時には診察の手伝いをしたこともあつた。依然町の人間と接するのを極力避けていた私にとっては、彼という時間は唯一の娯楽であり、同時に安らぎであつた。

*

*

*

ちょうどその頃から、町には不穏な空気が流れ始めた。女学校に通う少女が、ひどい殺され方をしたのだそうだ。私はそれを、現場に立ち合ったりヨウウから聞いた。

彼は、忙殺的な日々を送らねばならなくなった。通常の診察に加えて、その女学生の死因の解明を一手に請け負っていたから。私は見ていられなかった

彼は食事どころか、睡眠さえろくに取っていないなどやつれた顔で言うのだからね。何か私に出来ないことはないか、と訊いた私は、彼のためならばどんな苦勞も厭わないつもりでいた。私は常から己ほど利己的な人間もないだろうと思っていたが、そのように献身的な考えを私に抱かせたのは、リヨウによる精神的な救出に他ならないとも思っていたのだ。けれどもリヨウは、君に迷惑は掛けられない、と言う。まったく水臭い話さ！ 私がどれだけ彼に救われたのか訴えると、彼は照れを隠すように苦笑して、それじゃあ君の館に住まわせてくれないか、うちはどうにも手狭で、と肩をすくめて見せた。戸惑うのは今度は私の番だ。予想をしていたのは全く反対の事態だったこともあるが、私は自分でも御することの出来ない困った性癖を思つて、答えに躊躇したのだった。

性癖、というよりは病氣と言つた方が適切かもしれない。

* * *

その症状が現れだしたのは私が二十五の時だった。軍で訓練をしていた折に怪我をした部下がいてね。私は彼の傷口から滴る鮮血が何故だか無性に、飲みたくてたまらなくなったのだ。愕然としたよ。私にはそのような嗜好はなかったし、それが異常だとも分かつていたからね。私は知り合いの医者に秘密裏に輸血用の血を分けてもらつて、自らの途方もない欲求を宥めていた。

秘密というものは、得てして隠そうとすればするほど何処からか漏れ出すものだ。私は次第に、部下たちに「ヴァンパイア」や「吸

血将校」などと呼ばれるようになった。「啜血」はしても、断じて「吸血」したことはないのだけれどね。この症状は、どうやら精神が鬱状態になると発症するらしくてね。日本で暮らすようになってからは、ストックの血を飲んでいたんだが、それも底を尽きかけていた。

リヨウのお陰で症状はずいぶんマシになっていたとは言え、万が一、発作が出ないとも限らない。私は、それが恐ろしくてならなかった。彼もまた、部下たちのように私を化け物扱いするのではないかと、とね。リヨウから町の人々に私のことが漏れ、町を追い出されるのを恐れたのではない。たとえ私が病気について告白しても、彼は決して口外しないだろうと信じていた。その頃にはリヨウは私にとって、誰よりも信頼できる人間となっていたからね。そしてだからこそ、私は恐れたのだ。

私はさんざ迷った挙げ句、全て事情を話してリヨウの病院の輸血用血液を分けてもらうことで、了承しようとした。リヨウは、病院の血は与えられないと言った。代わりに俺の血をやる、と。驚きはひとしおだった。気味悪がられて当然だと思っていたし、最悪の場合、町を出ることも考えていたからね。

（俺を信じて打ち明けてくれたお前を裏切りはしない。お前は今この瞬間から、俺の患者だ。）

リヨウは私の家に移ると同時に、私のために、人間の吸血行動についての研究を始めた。その頃から、町の女学生が更に殺害されることが続いてね。月に二、三回のペースじゃなかったかな。町は痛いほどの緊張をたたえていた。男たちは夜通しで巡回をし、女学生がいる家を中心に警備を固めた。それでも、犠牲者は増えるばかりだった。

吸血鬼がこの町のどこかで息を潜めているのだとまことしやかに囁かれるようになった。その上、疑心暗鬼が広がり、一度は私を受

け入れた人々も私を避けるようになっていた　　リヨウを除いて、
ね。もちろん町の人々が私を回避したのは「病気」の所為ではなくて、
この金髪碧眼と言語のためだった。当時の私の会話にはまだ日本語
と英語が混在していたからね。私はそう知っていたけれども、まるで
化け物扱いをされている　　そう、軍にいた頃のように
と気が気ではなかった。だけれど、リヨウは私を支え続けた。それ
がなかったら、わたしはきっと折れてしまっていただろう。

*

*

*

そんな折、リヨウの元へ一通の手紙が届いた。彼が言うには、困ったことが起きたから至急戻ってきてほしい、という彼の妻からのものだったらしい。リヨウは仕方がないから三、四日屋敷を離れる、とその場で告げた。六月十四日のことだ。至急の手紙をもらったというのにリヨウはその日には発たなかった。午後などは写真師を呼んで、私とリヨウの二人を写真に撮らせた。急がなくてもよいのかと私が問うと、彼は如何にも樂觀したように構わない、と肩をすくめた。何故突然写真を撮ろうなどと言い出したのか、とまた私が問えば、リヨウはしげしげと私を眺めて、友情の証さ、と笑いを堪えるのだ。

結局リヨウが必要最低限の荷物を持って町を出たのは十六日の朝だった。駅までは馬車で半日はかかる。そこから東京までもう半日、彼が帰ってくるのは、早くとも十八日だろうかと思われた。

リヨウがいない時間はひどく退屈だった。私は丁寧にも彼が取り置いていつてくれた血を舐めながら、何度そう思ったことが分らない。

* * *

十七日の夜は、ひどく蒸し暑くて過ごしにくかった。小雨も降っていたように思う。

私が丁度毎晩のように「啜血」をしていたとき、屋敷のチャイムが鳴り響いた。私が玄関に出ると、町の人間が八人ばかり、いずれも屈強な男性ばかりだった。が立っていた。男たちは初めにリヨウは不在かと訊いた。東京に行っている、と答えてやると、彼らのうち一人が診療所に忘れ物をしたのだが、施錠されていて困

っている、開けてくれないかと頭を下げた。もちろんこのようなところもあるかとリヨウは私に鍵を託して行っていたし、断る理由もなかったため、私は彼らにそこで待っているように言い置いて屋敷の奥へと下がった。

鍵を手に町人たちの所へ戻ると、先程頭を下げた男が、私が飲みかけたままダイニングルームに置いていた血を突きつけた。これは何かと訊かれたが、血だとしか答えられない。見れば分かるのだからね。まさか飲んでいたとは言えないから、リヨウの研究の一環だと答えた。が、その時には遅かったようだ。

弁明しようと彼らに歩み寄った直後、私は後頭部に強い衝撃を覚えた。一人が奥に潜んでいて、背後から私に迫っていたのだろう。不覚を取った、と舌打ちしつつも、私は床に膝をついた。しかし、退役していたとはいえ、私も元は歴とした軍人だ。無抵抗に殺されてやるつもりはさらさらない。

誰かが娘を返せ、吸血鬼！ と叫んだ。それが合図となり、彼らは私に肉迫してきた。私は片手で頭部を庇いながら、あまり得意ではないけれども体術で応戦した。そうするより他はなかったのだ。銃もサーベルも、すべて三階の自室で埃を被っていたのだから。

男たちは各々手に包丁だの斧だのを握り締めていた。彼らが丁寧にも教えてくれた話に因れば、彼らの殺された娘や妹たちと同じように、犯人である私も切り刻んでくれるのだという。

冗談じゃない、と私は遠くなる意識を何とか保ちながら息を吐いた。とんだ濡れ衣だ。そもそも切り刻んでしまったら飲める血の量も減ってしまうのだから、吸血鬼がそんなことをするはずがないだろうとも思った。追いつめられていた割に、ずいぶん冷静な思考をしていたものだ。けれどもそれをそのまま彼らに伝えることが出来たならば、状況はいくらかわわっていたのかもしれないね。

町の少女たちを何故殺した、とひときわ若い声が訊いた。他の男たちのそれと比べて幾ばくか友好的ではあったものの、刃渡り五、六十センチメートルはあるかというナイフを手にして私に突きつけ

ていたのだから、その好意が上辺だけだということは明白だった。

私は違うと答え、彼らを見上げた。私に落とされていた視線はいずれも獐猛で、彼らの方がよほど化け物じみている。ともあれあばら骨をはじめとする全身の骨を折られているこの状況下ではそれ以上の反論をする気にもなれなかった。

流れ出る鮮血と共に力が抜けていき、意識までも私から離れていくとするのだ。どうにも苦しかった。いつそひと思いに殺してくれればよいものを、あえて急所は外されているものだから始末に追えない、と吐き捨てた。

睨み上げることで抵抗の意志を示した私に、男たちが次の手を加えようとしたときだ。玄関の外で馬車が止まる音がし、それに男性が何やら話している声が続いた。

嗚呼また増えるのか、と私は目を閉じた。その状況で、助けを期待するほど楽観的な思考は持ち合わせていなかったからね。

外れるのではないかというほど勢いよく開け放たれたドアの前には、男性が一人立っていた。はじめ私は、それが誰なのか分からなかった。というのも、私は男たちによって組み敷かれ、絨毯敷きの床に這いつくばる体勢をとらされていたために、それが男性で黒いスラックスの裾の所々に泥がはねていると言うことしか確認できなかったのだ。

男性はドアの前に立ち止まったまま、呆然とした声で町人たちに何をしているのかと糾した。その声には確かに聞き覚えがあった。

顔を少し持ち上げて男性の顔を捉えた私の瞳は、安堵が満ち溢れていただろう。

男性はこちらに駆け寄り、私の身体を抱きかかえるように仰向けた。それから再び、今度は更に強い口調で彼らを糾した。町人たちは突然の乱入者に驚きが見せたが、すぐに開き直ってこいつは少女たちを殺した、と喚いた。続けて何故吸血鬼を庇っている、と聞き返す。男性は　リヨウは、サイプリスが吸血鬼であるはずがない、と低く押し殺した声で言った。そこには今まで聞いたことのない、

い、一種残酷ささえ伺わせる冷ややかな響きがあり、私でさえこれは本当にリヨウなのだろうか、疑ってしまったほどだ。

けれども私にとって、リヨウが帰ってきたという事実は、名状しがたい安堵をもって張りつめていた緊張さえも解したのだった。

私は目を閉じた。リヨウと男たちが言い争う声が、ひどく遠くに聞こえたのを覚えている。

*

*

*

目が覚めたとき、私は酷く喉が渴いていることに気がついた。碎かれたはずの骨々はすっかりくつついたようで、体を動かすのに伴う激痛もない。一体どれほど長く眠っていたのだろうかと立ち上がり、ふと窓の方を見た。部屋は灯りが点っていて、外は日が暮れていたものだから、窓ガラスは鏡のように部屋の中を映していた。

音を立てないように扉を開けて入ってきたリヨウが、視線を上げて驚いたように目を丸くしたのが見えた。私は彼のその表情と、光を反射して鏡になった窓ガラスを見て全てを悟ったのだ。私は、私が最も恐れた生き物になってしまったのだ、と。

どういう意味かは、言うまでもないね。ガラスに何が映っていたのか。何も映ってはいなかったんだよ。私は鏡に映らない、ヴァンパイアになってしまったのだ。

私は、あの忌まわしい事件の直後に危篤状態に陥ったのだという。リヨウは私を三日三晩手当したが、四日目の早朝。その甲斐もなく、私は死んだのだと言った。悲しみのあまり何も手に付かなかったリヨウは、私の屍体を寝かせたベッドサイドから離れられず、ひたすら自責の念に駆られていた。けれどもそれから二日経ったとき、彼は私の屍体に奇妙な点を認めたのだ。

全身の切り傷が無くなっていることに。全身の骨が、すべてくつついていることに。脈拍は確かにないのに、私が呼吸をしていることに、ね。

その後すぐだそうだが、私が目覚めたのは。リヨウはこのような身体になってしまったと悲嘆する私を抱きしめて、もう一度話が出来てよかった、と泣いた。いつもどこか高慢な

態度を私に対してとっていた彼が、そのように涙を見せると言うことはもちろん初めてだったから、私はたいそう戸惑った。それでも彼が喜んでくれたことは本当に嬉しく思ったし、紛うことなき化物となってしまうたこの身でも、再び至福を手に入れられるかもしれない、と　　わずかではない希望が見えたよ。

*

*

*

こうして私は再びリヨウとの生活を始めたのだ。町人たちにはリヨウから、私が高んとか一命を取り留めたのだと伝えた。屋敷には大量の謝罪の手紙と見舞品が届いたが、私はそれらをすべて焼却して、生前以上に町に出なくなった。

血は相変わらずリヨウからもらっていたが、生前とは飲む量が違う。それまではほんの嗜好する程度だったのが、この身体になつてしまつてからは血液そのものが『食事』となつた。私が恐れていたのは、リヨウの血を吸いすぎてしまうのではないかということだ。リヨウには黙っていたが、一度の『食事』を腹一杯摂るとすると、成人男性の血液量のおよそ半分は飲まなければならないようだった。そんなことをしては失血死させてしまふだろう？

私は常に空腹をこらえていた。

この身体になつて良かったことは、酷く鼻が利くことかな。私はリヨウと共に、女学生が殺された現場に毎夜通つた。どうしてあのように惨たらしい目に遭わなくてはならなかったのか　　真犯人を見つけたい一心だった。あの夜、リヨウに届いた手紙はまるきりの偽物だったらしい。そのように手が込んだことまでして私を貶めようとする人間に、正直心当たりはなかったのね。藁をも掴む思いだったよ。

現場に共通していたのは、ひどくきつい香水のような、甘ったるい臭いがどこにもこびり付いていたことだ。それが犯人のものであることは、明白だった。

そのように毎夜動き回っていれば、より腹が減るのは当然のことだ。けれどもこの頃、リヨウは疲労と貧血が重なって体調を崩しがちだったのだ。

私は、『食事』を絶った。彼の身体を蝕んでまで生き長らえようとは思っていなかったからね。私は、食事を絶てば人間のように餓死をするものと思っていた。だが実際は……昨晩のとおりだ。自らの身を守ろうとして『暴走』してしまうのだ。

意識がなくなり　気づけば、私は理性を失って『食事』をしていた。リヨウのためには思っていたことは、結果として、彼の命を奪ってしまったのだ。　あの時ほど自分を呪ったことはない。

私は、絶望の闇に囚われた。様々な方法を使って自らの命を絶とうとした。　だが、死ねなかった。

私は屋敷の庭にリヨウの墓を建て、それから犯人捜しを再開した。そうでもしなければ、私は狂ってしまいそうだったから。

そして私はついに見つけた。

驚くことに、それはあの夜、私を殺したうちの一人　私にナイフを突きつけた、あの若い男だったのだ。

男は、少女たちを殺すことに快楽を覚える性質の人間だったらしい。その所行の全てを、私が外国人だったということだけで全てなすりつけようとしたのだ。

私はある晩、男の家に忍び込み、彼を糺した。彼は全て認めたよ。笑いながらね！

その笑みを見た私は、酷く残酷な衝動に駆られた。

この男がいなければ、このような身体になることはなかったのに　この男が馬鹿なことをしなければ、リヨウが死ぬこともなかったのに、と。

私が不穏なことを考えたのが分かったのだろう。男は暖炉から火掻き棒を取り出して私に向けて振り回した。生身の人間であれば多少なりひるんだだろうが、私にとっては脅しにさえならない。私はそれを右手で奪うと、残った手で鳩尾に当て身を食らわせてやった。右手の平は熱を帯びていた火掻き棒の所為で焼け焦げているようだったけれど、構わなかった。

力の抜けた男の首筋に牙を剥き、それこそ血の気が無くなるほど私は『食事』を貪り続けたのだ。　不味かったよ。血の味というのは、その人間の性根によって善し悪しがあるのだろうか、というほど。悪酒のような不味さだった。

ぐたりと倒れた男を見た瞬間、何とも言えぬ快感と、同時に、途方もない空虚が腹の底から湧いてきて、私は気分が悪くなった。身体はとつくにヴァンパイアであつたのに、心はまだ人間だったようだ。身も心も化け物に成り下がつたという事実が、私のわずかばかり残っていた良心を責めた。

その責め苦に耐えかねた私は、また食事を絶った。馬鹿だと思うだ

ろう　　だけれど血を見るたびに、リヨウを殺した日のことを思い出すのだよ。男を殺したこと自体には、正直何の感慨も湧かなかった。ただ、犯人を見つけて恨みを晴らしてしまえば、後に残ったのはリヨウを殺してしまったことを嘆き続ける私一人だ。私が蘇ったのはきつと、真犯人を捜すことへの執念と、再びリヨウと暮らすことへの執着に違いない。そのどちらも失っては、私は生きる理由さえ見つけられなかったのだ。

私はそれ以来、完全に人との関わりを切った。町の人間たちは、私が屋敷を捨てたか、死んだのだろうと思っていたようだね。それは私にとって好都合さ。疑いをかけられることなく『食事』をすることが出来たからね。私は一人殺めるたびに薔薇の苗を植えるようになった。罪滅ぼしにはならないだろうけれど、私が一体何人を手にかけたのか忘れないために。

すっかり話が長くなってしまったね、と笑んだサイプリスは、ふと視線を落として流惟を見た。あどけない寝顔に表情を緩ませる姿からは、おおよそ彼が語ったような壮絶な半生を送ってきたとは予想も付かない。

だからこそタチが悪い、と那由多は胸中で盛大に毒づく。

サイプリスは酷く愛おしげに、流惟の髪を撫でていた。那由多は不機嫌そうに顔をしかめてから、青年の美貌を真っ直ぐに見据えた。

「あんたが流惟に助けを求めた理由、十年前の流惟の交通事故が何か関係しているのか？」

眼鏡の下のはらは、サイプリスの心中を探るようにひたりと彼に向けられて微動だにしない。一方青年も、ふと碧眼を細めたが、何も答えようとはしない。

「答えられねえってのか。あんたは、車にはねられた流惟を叶医院に運んできて、俺と共にあいつに輸血をした男だった。違わねえだろ？」

「驚いたな、その通りだよ……いつから気づいていた？」

「あんたの姿　子供じゃなくて今のナリの方、だ　を見てすぐに分かった。まあ、子供の姿の時から、見覚えがあるなどという気はしていた」

「そうか……、それは迂闊だったな。ずいぶん前のことだから、君はもう忘れてしまったと思っていたが」

「そんなに耄碌する歳じゃねえ」

那由多は苦々しげに吐き捨てる。あくまで高圧的な態度を崩さず、会話の主導権を握っている彼だったが、その実余裕などまるでなく、

手の震えを否応なしに感じていた。サイプリスを恐れているのではない。彼がヴァンパイアであるということは最早那由多には「今更」のことであり、またサイプリスが自分を襲うことはないという確信もしていた。

恐れているのはただ一つだ　サイプリスの血液を輸血された流惟が、彼と同様にヴァンパイアになってしまっているのではないかと。

「ルイならば、ヴァンパイアになんていないから安心するとい
い」

那由多の手の震えに気付いたサイプリスは、そう落ち着いた口調で言い諭す。たちまち那由多が、安堵したようなそれでいて不愉快そうな表情を作ったことは言うまでもない。

「ヴァンパイアの血は驚異的な回復力と延命効果を持つけれど、あくまでその程度さ。ルイの血には一部私の血が含まれているが、問題は無いよ」

「待て。あなたの血が未だ流惟の血液の中に有るはずがないだろう。白血球と血小板の寿命は数日、赤血球さえ保って四ヶ月前後だ。あの事故から一体何年経っていると思っているんだ？」

「それは、人間の場合だろう。生憎と私の血液は人間のそれではない。残念ながら、ね」

サイプリスが肩をすくめると、那由多は苦渋の表情を作って舌打ちをした。ヴァンパイアに人間の常識など通用しないのだ。

「私が思うに、ヴァンパイアになる条件というのは、第一に『怨恨』だ。一般にヴァンパイアに血を吸われるとその人間もヴァンパイアになってしまふというけれど、それは根拠のない嘘に過ぎない。それが事実であるならば、リョウは今頃私の隣にいたはずだからね。

逆にヴァンパイアの血液を与えればヴァンパイアになる確率は、それに比べたら遙かに高まる。だけれどそれは、人間が死んで後に幽霊となつて、こちらの世に残る確率と大差ない。その程度さ。怨恨や、それに等しく強い心残りが無ければヴァンパイアになれな

いのだよ。つまり、ヴァンパイアの血などなくとも、強いこの世への心残りです。私はヴァンパイアになれた。望んではいなかったけれどね」

だからルイは大丈夫、と。サイプリスは微笑んだけれど、それはどこか自嘲な色が濃い。

「ルイは私にとっての希望だ」

「それほど大切に思っている子に、殺しをさせるつてのか。流惟にはあんたを殺すなんて無理だ。そもそも、まだ流惟は中学生だぞ？ そんな子供に人殺しをさせたら、一生罪の意識を抱えて生きることになる」

サイプリスの胸倉を掴まんとばかりに怒りを露わにした那由多は、流惟を起こしてしまわないように、あくまで押し殺した声で続けた。
「あんたは流惟に、自分と同じ思いをさせるつもりか？」

「同じではない。私は、化け物だ。ルイは殺人を犯すのではない。化け物退治をするだけだ」

「詭弁だ。そうやって割り切れるほど、流惟は大人じゃない」

那由多の言葉に、サイプリスは目を伏せた。それはよく分かっている、と眉根を絞る様には、彼の流惟を大切に思う気持ちが十分すぎるほどよく現れていた。けれども那由多の口調は険しいままだ。

「どうしても死にたいのなら俺が殺してやる」

「いや 君に私は殺せないよ」

「何だと？」

那由多の瞳が物騒にぎらつく。サイプリスは話を聞いてくれ、と彼の手を握った。あまりに冷たいその感触に、那由多が僅かに身じろぐ。

「ルイは私にとって希望だ。それと同時に、銀の弾丸シルバー・フレッドなのだよ。

血の呪いというのかな、ヴァンパイアはヴァンパイア、もしくは己の血を与えた者にしか殺すことが出来ない。君はリヨウの

限りなく銀の弾丸に近づいた男の曾孫だけれど、きっと殺せないよ」

「だから流惟なのか？ 他にあんたが血を与えた人間は、」

「後にも先にも、ルイひとりだろうね」

「曾祖父さんが、あんたの銀の弾丸に限りなく近づいたと言ったな」
確認するように詰問した那由多は、しかし何か確信を抱いている
ようだ。サイプリスは少し怪訝そうに首肯する。

「だが、それは私が彼に心を開いたという意味であって」

「それだけじゃあねえだろ。……いや、あんたは知らないのかもしれないな。曾祖父さんはあんたの病氣及び、吸血鬼になつてからの
体質を研究していたようだ。その研究を紐解けば、何かしら
分かるかもしれねえな」

「え……、」

いよいよ目を見開いたサイプリスに握られたままだった手を払つ
て、那由多は先程まで読んでいた和綴じの冊子を手に取った。

「流惟に何かあつたら、あんたの血を無理矢理飲んででも殺
すからな」

そう言い置くと、那由多は忌々しげに舌打ちをして部屋を出る。

取り残されたサイプリスは、呆然と、閉じられた扉を見つめた。

「サイプリスさん、」

半身を起こした流惟が背後から声を掛けると、サイプリスは小さく身体を跳ねさせて彼女を振り返った。昨晚のこともあってかサイプリスの顔面は蒼白で、見るからに体調が悪そうだ。流惟は慌てて立ち上がると、サイプリスをベッドに腰掛けさせた。

「今の話を聞いていたのかい？」

「あの……、ごめんなさい。盗み聞きするつもりはなかったんです」
申し訳なさそうに肩を落とすと、サイプリスは流惟の髪を優しく梳いた。相手が那由多ならば子供扱いをするなど憤慨するところであるが、サイプリスではそうもいかない。

「気にしなくてもいい。ルイにも話さなければならぬことだったのだから」

「……昨日の夜、サイプリスさんが倒れるまで……夢を、見ていたんです」

「夢……？」

「たぶんあなたが、リョウさんを殺してしまった夜のことだと思います。この部屋で、あなたが男の人の血を」

「嗚呼、」

瞑目したサイプリスは、組んだ手を額に当てて深く息を吐いた。そのたびに彼の腹の底に潜む孤独が吐き出されるように思えた。

これは触れてはいけないことだったのかもしれない、と流惟は小さく息を飲む。

「夢とはいえ、怖い思いをさせてしまったね。だけれど、それでよく分かっただろう？ 私はおぞましい化け物なんだ。同情はいらな

いよ」

「サイプリスさん、」

流惟は泣きそうな顔をしてサイプリスの手を握る。彼は少し驚いたように顔を上げた。

「ありがとう」

「え、」

「わたしのこと、小さいときに助けてくれたのはあなただったんですね。わたしの天使は、あなただった」

「天使？」

首をかしげたサイプリスの黄金色の髪が、肩口を静かに流れる。

差し込んだ朝陽を受けたそれは彼の背負う悲しみに反してあたたかで、やさしい。

驚きを隠さない碧い瞳に凝視されると、恥ずかしくて、少し、居心地が悪い。

「あの事故のことはほとんど覚えていないけど　その綺麗な髪の色だけ、今でもまだ目に焼き付いているんです。きっと、それまで見たことがないくらい綺麗だったから、記憶に残っていたんでしょうね。後から思い出しては、ああ、わたしは天使に助けてもらったんだって嬉しくなっていました」

はにかんだ流惟はすぐに表情を曇らせる。目には見る間に涙が浮かんでくる。

「だから、今度はわたしがあなたを助けてあげたい、と思ったけど……今も、思っているけれど、わたしには、あなたを殺すことなんて出来ないから……っ、」

「ルイ……」

「わたしを助けてくれたときから、あなたは死を望んでいたんですか？　あなたが死ぬために、わたしに血をくれたんですか？」

聞いたところで流惟の身体にサイプリスの血液が流れていることに変わりはない。どんな理由にしろ自分を助けてくれたこの心優しいヴァンパイアに、流惟は心から感謝をしている。

それでも問わずにはいられなかったのは、記憶の中の金髪があまりに神々しく清らかで、とても死を望んでいたようには思えなかったからだ。

「こんなことを言ったところで信じてもらえるか分からないが、あの時私は、リヨウを亡くして以来初めて、誰かを救いたいと思ったんだ」

サイプリスは真摯な眼差しを真っ直ぐに流惟に向けて口を開いた。そうして固く組んでいた指をほどいて、流惟の額の、薄く残る傷跡に這わせる。

「私はリヨウの子孫がやっているという病院を捜していた。だけれど迷ってしまつて途方に暮れていてね、幼い君が私に声を掛けて、自分が案内してやると、私の手を引いてくれたんだよ。君は覚えていないようだけれどね。歩き出した時、君が被っていた帽子が風に飛ばされた。君は私の手を離して、道路へ飛び出して」

サイプリスの顔が苦しげに歪む。事故に遭つたのは私なのに、彼の方がずっと痛そうだと、流惟は彼の手を握る手に、力を込めた。

「血まみれの君を見て、私は恐ろしくなった。失われていく顔色が、血が、あの時と　リヨウをこの手にかけてしまった時と同じだったから。そして、絶対にこの子を死なせてはならないと、思った」

大窓の外の世界は清々しく晴れ渡っていた。木の葉についた朝露が光を反射して輝いている。それは君の涙に似ているね、とサイプリスは流惟の頬を親指で拭った。

「泣かないで、ルイ。私はこの日を待つていたんだ。ナユタが言うように、優しい君には辛いことかもしれない。それは重々承知だ。だけれどね、私はこの数十年来忘れていた人間らしい気持ちを思い出させてくれた君に、殺して欲しいんだ。あの事故の直前に、君が私を案内しようとして握ってくれた手は、とても温かかった。その温かい手によつてもたらされる死ならば　きつと、苦しみはない」

そう言いながら静かに頭を撫でるサイプリスは、悲しげに、幸せそうに、微笑んでいた。

流惟は目を伏せてむせび泣きながら、サイプリスに抱きつく。彼の肩口に押しつけた顔にも、首に回した腕にも、彼の体温は伝わってこない。だけれど背中を優しくさすってくれる手は、どうしてかとても温かいのだ。　　込み上げてくる途方もない苦しさを、切なさを、もどかしさを、どうすることも出来ずにただ泣きじゃくった。

*

*

*

「わたしには、年の離れたきょうだいができるはずだった」

落ち着いた流惟はサイプリスの手を握りながら話し始める。泣き腫らした目は酷く重くて、開いているのさえつらいけれど、サイプリスを見据えて。

「すぐすぐ楽しみで、名前とかも考えていてさ。買い物に行くたびに、男の子ならこんなおもちゃを欲しがるんだろうなあ、女の子なら可愛い服を着せたいなあ、なんてことばかり考えていて」

「……」

「でもさ、全部、無駄になっちゃった」

微笑。悲しい話のはずなのに、以前にこの話を那由多にした時も微笑みが顔に張り付いていた気がする。それは今回も例外ではなくて、微笑。それは今にも泣き出しそうな張り詰めた気持ちを誤魔化すためかも、しれない。

「男か女かも分からなかった。お母さんの顔も、お父さんの顔も知らないまま……自分の存在も理解できないまま、逝っちゃった。本当、せつかち。誰に似たんだろ。うちの家族はみんな、おっとりしているのにな」

あの時の慟哭を忘れることが出来ない　流惟は、サイプリス

の碧い瞳を形取る長い睫毛をぼんやりと見ながら考えた。

あまりに残酷で、あまりに悲しすぎる仕打ち。毎晩涙が止まらなくて、気が変になりそうだった。

「その時、人間って本当に死ぬんだなあって、しみじみ思った。変な話だけど　わたしね、身近な人の死って初めてで、心からそう理解したのも多分、初めてだった」

流惟の声の調子は変わらない。作文でも読んでいるかのように淡々としていた。それがあまりに落ち着いた口調であるためか、サイプリスが氣遣うように彼女の名を呼ぶ。

「お母さんやお父さんは、あの子の代わりに死んでやる事が出来たら、どんなにか良かっただろうって言っていた。でもね、わたしはそうは思わなかった。」

「むしろ、」
流惟の手に力が籠もる。サイプリスは静かにその手を握り返した。真っ直ぐと、窓の外を見ている流惟の双眸が、揺らぐことはない。ただ、じつと。

「むしろ生きてあげなきゃ、って思ったの。あの子の死を背負って、精一杯生きなくちゃ、って。だって、生きることとは死ぬことよりずっと辛くて、苦しくて、難しくて、幸せな、ことだから」

そう、流惟は微笑^{わら}った。はつとするほど美しく、純粹な笑顔。見惚れるように瞠目したサイプリスの両手を握り直して、流惟は眉尻を下げた。

「だから、死にたいなんて言わないで。リヨウさんは、あなたを苦しめるために一緒に暮らしていたんじゃないでしょう？ 危険を承知であなたと生活していたのは、あなたに生きることの楽しさを教えてあげたかったんじゃないかな。わたしがここを訪れたように、リヨウさんもあなたのことを助けたかったんだよ」

「私を、助けたかつ……た？」

サイプリスが啞然と呟く。流惟は大きく頷いた。

「だって、友達なんでしょ？ 那由多先生が見つけたあなたとリヨウさんの写真。リヨウさん、すごく幸せそうだったもん。あなたのことを迷惑だとか、疎ましく思っていたならそんな顔は出来ないよね。それに。リヨウさんは、ヴァンパイアにはなっていないじゃない」

「それは……」

「あなたに殺されたことを恨んでいたなら、リヨウさんはあなたのようにヴァンパイアになった。でも、そうなっていないってことは、

リヨウさんはあなたに殺されたけれど、決して恨んでなんかいない
ってこと、でしょう？」

顔をのぞき込んだ流惟に、サイプリスは僅かに身を引いて目を伏
せた。

「サイプリスさんは、とても辛かったと思います。わたしなんか
想像できないくらいに。でも、それなら尚更　　生きること
諦めちゃだめだよ。生きたくても生きられない人や、あなたのため
に犠牲になった人　　そう言う人たちのためにも、生きなきゃ。
生きて、楽しいことも辛いことも苦しいことも全部受け入れて

リヨウさんのこと、覚えていることがあなたの償いでしょう？
死んだ人たちのために遣された人間が出来るのは、その人たちの死
を背負って、その人たちの分まで生きることだと、わたしは思いま
す」

静かに目を閉じたサイプリスは、泣いていた。声を出さずに、静
かに。

「　　ごめんなさい、偉そうなことを言って……」

流惟はおろおろと言うと、先程自分がしてもらったように、親指
で彼の涙を拭った。

「あの、でも……あの時の自分を、見ているような気がして、悲し
くなってきたちゃって」

「そうか」

「うん。　　頑張ろう、サイプリスさん。背負った人の重さで立
てなくなるのって、何だか情けないじゃないですか、」

「……ルイ」

サイプリスが微笑む。ひどくすっきりとしたような、自然な表情
で。

「ありがとう」

「……どういたしまして」

.

「話は終わったか」

部屋に入ってきた那由多は、両手に和綴じの冊子を抱えていた。

「流惟、こいつに何もされていないだろうな？」

「されてないってば。もう、せんせは本当に心配性なんだからなあ」
流惟はむうと口を尖らせてみせる。サイプリスが苦笑して、彼女の頭を撫でた。

「随分とすつきりした顔しているじゃないか。感謝しろよ 流
惟が手を汚さなくても、お前が死ねる方法を見つけてやったんだからな」

「せんせっ！ でもサイプリスさんは、生きるって……」

「話は最後まで聞け、ばか。死ぬと言ったって、残念ながら今すぐではない。寿命が来たら、の話だ」

流惟の肩を引き寄せた那由多は、手にしていた冊子のうち一冊を覗き込ませる。

「しかし、ヴァンパイアの血は不老不死の力を持っている」

「そうらしいな。だが、曾祖父さんの研究では 吸血鬼の血液
同士は強力すぎて、互いに殺し合うとある。丁度、酸とアルカリの
中和反応のようなものだ。そうなんだろう？」

「ああ、それは事実だ。 だからヴァンパイアは、同族の血を
吸うことは許されていない。自滅に繋がるからね」

サイプリスが神妙な顔をして頷くと、那由多は口角を持ち上げて、
冊子の黄ばんだページを繰って続ける。

「そこで、だ。あんたは言ったな、流惟の血液の中には吸血鬼の血
がまだ残っていると。それを継続的に飲み続ければ、ごく僅かずつ

ではあるが、あんたの中の吸血鬼の血は死んでいくわけだ。もちろんその死んだ分は、俺の血をくれてやる。吸血鬼の体内の血液は、骨髓で生成するのではなく摂取した血液を予めあつた吸血鬼の血液によって同質のものに作りかえることによって満たされているらしいな。それならば、何年かかるかは分からんが　　いずれ、あんたは『人間』になるってことだ」

「すごい……！　先生、それすごいじゃない！」

流惟が目を輝かせて那由多の腰に縋る。驚きを隠せずに言葉を失ったサイプリスも、少なからず表情が明るくなっていた。

「ただし、あんたが吸血鬼の血を失って、どんな副作用があるかが分からん。一度は死んでいる肉体だからな。すぐに衰えて死ぬかもしれない。それから　　流惟にも、負担がかかる」

「たとえすぐに死んでしまったとしても私は構わない。それまでに精一杯生きればいいのだから。もちろん、それはルイに無理をさせないならば、の話だ。君の体調を崩すようなことをするくらいなら、今のままの方が遥かにマシだ」

那由多とサイプリスの視線はひとと流惟に向けられた。両者とも整った顔立ちをしているだけに、こうして注目されると威圧感がある。

流惟は二人の顔を見比べて、

「わたしは、それでサイプリスさんが救われるなら喜んで血をあげるよ。　　と言うか、小さい時に助けてもらった恩返しができるんだよね。だから、すっごく嬉しい！」

無邪気な笑顔に、那由多とサイプリスも相好を崩した。

ACT・5 Chap・1

四月。桜が舞う中を少女は駆け抜けた。坂の下、小さな病院まで一直線に。

「おはようございます!」

扉を押し開けた流惟の声が叶医院の中に明るく響き渡る。待合室に人の姿はないが、その奥の診察室の方からは話し声がした。

流惟はそつと中を覗く。

「おい、くそじじい! 貴様、俺が食事をしている時に目の前で血液を飲むなど、何回言えば分かるんだ!」

「安心するといい。もうすっかり理解しているからな。耳たこだ」

「分かっているなら俺の言うとおりにしろ」

「気にするな。軟弱なお前への嫌がらせだ」

何とも低次元な言い争いだ。揃ってこの町の王子様と並び称されている二人のこのような姿は日常茶飯事である。

思わず吹き出すと、那由多とサイプリスは同時に流惟を振り返った。

仲が悪いのか良いのか、よく分からない二人だ。

「おはようございます」

「オウ。今日から学校か?」

「はい。だから、その前にサイプリスのご飯を、と思って」

『ご飯』と言えば至極人間的な印象を聞く人に与えるが、その『ご飯』自体が決して人間的ではない。サイプリスのご飯　つまり血液を、流惟と那由多は毎朝少量ずつ彼に提供するのがここ数ヶ月の日課だった。

「ならば、学校に行つてよし!」

「え、でも」

「このじじいは当分絶食するそうだ。絶食ダイエットだってよ」

那由多は不機嫌そうに言うと、サイプリスを見遣る。青年サイプ

リスは人を小馬鹿にしたような嫌味な表情で応じる。

「血を吸い尽くしてやるうか、若造」

「くたばれ、じじい」

第二次口喧嘩勃発。流惟は那由多の椅子に腰掛けて、二人を眺めた。

サイプリスは現在、那由多の病院に居候をしている。昨夏から比べたら別人のように、毎日楽しそうに見えた。顔色もいい。明るくなって、自嘲や影のある微笑ではない、心からの笑顔も見せる。

「それじゃあ、わたし、学校行つてきます」

流惟が立ち上がると、サイプリスは上着を羽織って、そこまで送ろう、と笑んだ。

「実力テスト、頑張れよ」

「はいっ!」

玄関まで見送りに来た那由多がひらひらと手を振るのに元気よく応えて、医院の外に出た。

ACT・5 Chap・1-2

*

*

*

「昨日、ひしよかん緋薔館に行ってきた」

桜並木の下で、不意にサイプリスが口を開く。流惟は目を丸くして彼を見上げた。

「昨日？ 昨日のいつ？」

「夜。私はヴァンパイアです。ヴァンパイアの辞書には不可能の文字はないって、聞いたことがありますか？」

春日町は一時間や二時間で行ける場所ではないのに、と首を傾げた流惟に、サイプリスはそう言って笑いかけた。

「リヨウのところに行ってきたんだ。 いろいろ伝えなくてはと、思っていたから、」

「いろいろ？」

「そう。最近私は、この身体になって以来初めて、『生きている』のだとを感じるんだ。だから、近況報告のようなものかな。目で見たいもの、肌で感じたことを、リヨウに聞いて欲しくて。もちろん、ルイのこと話したよ」

「なんか、照れくさいなあ」

流惟ははにかんで早足になった。一方、サイプリスは立ち止まっ
て続ける。

「いつだったか、緋薔館のバラは皆血の色をしていると、言った
らう」

流惟が振り向く。サイプリスの顔色を伺っているようだった。

「リヨウの墓の周りは尚更、深紅のバラしか咲かなかった。

昨日行った時も、相変わらずあか緋かった」

サイプリスは平気だ、と言うように微笑して、でも、と言葉を紡

ぐ。

「ただ、一輪だけ……真っ白なバラが咲いていた」

深紅によく映える純白。

一面に広がる香。

ただ冷たかった墓石が僅かに温かく感じたのは、気のせいだったのだろうか。

「私はこの手のひらの痣を見るたびに、愛おしく思っていた。憎い男のせいでついた痣だけれど、私の罪を教えてくれるからね。今でも愛おしいのに変わりはないけれど、それは同じ理由からではない」
サイプリスは、流惟に右手を差し出した。人形のように白い肌に残る痣は一輪のバラを描いている。そっとそれを指でなぞって、流惟は首を傾げた。

「リヨウの墓の前に咲いた、一輪のバラを思い出すんだ。思

い上がりかもしれないけれど、私は赦されたのではないかと思える。忘れていたリヨウとの思い出が、蘇ってくる」

「思い上がりなんかじゃないよ　きつと。私もこの痣、好きだな。すごく綺麗だもん！」

無邪気に笑う流惟に、サイプリスも目を細めた。そうか、と優しく甘い声が言って、少女の笑みをますます深める。

「ルイがそう思ってくれるならば、もっと、愛おしく思えてきたよ」

Story is the . . .
And, Thanks for your reading!!!

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9162a/>

てのひらの中のバラ～或るヴァンパイアの贖罪～

2010年10月10日15時10分発行